書評

小林茂編

『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』

石原　潤

本書の編者は、一九九〇年代以来、外邦図（旧日本軍が作製した日本本土以外の地図）研究を精力的に進め、特に二〇〇〇年代初頭以後、研究グループを立ち上げ、そのリーダーとして顕著な成果を収めて来た。既にその一端は、小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域――「外邦図」へのアプローチ』（大阪大学出版会、二〇〇九年）や小林茂著『外邦図――帝国日本のアジア地図』（中公新書、二〇一一年）として結実している。本書は、同グループの研究活動中に、編者らが米国議会図書館において発見した初期外邦図群の整理と、それに基づく研究の成果を集大成したものである。初期外邦図とは、明治維新後、日清・日露戦争以前に日本軍が作製した外邦図のことで、従来は、その存在自体充分には知られておらず、ましてやその構成や作製過程についてはほとんど未知の領域であった。

本書の構成は、三部七章に加え、二つの目録と六つのコラムからなる。それぞれの執筆者は、単独の場合もあるが、複数である場合が一般で、個々の章については紙数の都合で紹介を省略するが、編者に加え、掲出順で、岡田郷子、渡辺理絵、鳴海邦匡、山近久美子、山本健太、波江彰彦、鈴木淳子、小林基、藤山友治の合計十名である。

全体の序章に当たる第一章「近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図」では、本研究をめぐる学界の動向、研究の契機、研究の射程等について論じる。まず、近年、内外の学界において近代国家、特に帝国型国家における地図・海図の役割への関心の高まりがあるが、我が国の従来の地図史研究では、このような側面についてはほとんど取り上げられて来なかったとする。他方で、終戦直後参謀本部から持ち出されて全国各地の大学に分与された大量の外邦図については、近年、東北大、京大[1]、お茶の水女子大などでその目録化が進み、かつそのスキャン画像を公開する「外邦図デジタルアーカイブ」の整備も東北大を中心に進展したが、これらの大学に収蔵されている外邦図は、主として昭和期の新しい外邦図であり、古い外邦図については、これら諸大学の所蔵以外での探索と検討が不可欠であるとする。

そこで当該研究グループでは、終戦直後米軍が長野県に疎開していた陸地測量部から接収し、その後その多くが移管された米国議会図書館所蔵の大量の外邦図について、二〇〇二年以降調査を開始し、二〇〇八年に明治前期作製の多数の手描き測量図の存在を確認するに至ったのである。これらの測量図の存在については、一部の研究者によって推測されてはいたものの、陸地測量部の「正史」にあたる『陸地測量部沿革史』などにもほとんど言及されていない、いわば忘れられた存在であったと云う。一方、測量

図に先行して明治の初期に諸外国の地図を入手し編集した初期編集外邦図についても、その存在はある程度知られてはいたが、その全貌は明らかでなかったので、当研究グループでは、我が国の国会図書館や国立公文書館内閣文庫等での検索・閲覧を徹底して行い、その目録化を進めると共に、米国議会図書館での探索を進めた結果、二〇一二年、編集図の原図と考えられる地図や海図の一部をも突き止めることが出来たのである。

こうして編者らは、明治以降の日本の海外地理情報の収集が、初期編集外邦図の時代→初期外邦測量図の時代→戦時測量外邦図の時代（日清戦争以後）へと、段階的に進展して行ったとの見通しのもとに、本書を前二者の実態の解明に充てるとしている。

第Ⅰ部を構成する二つの章では、主として初期編集外邦図が扱われる。まず第二章「東アジア地域に関する初期外邦図の編集と刊行」では、当研究グループが確認することが出来た初期編集外邦図の一覧表（四類型に分類）が提示されると共に、それらがいかに編集・刊行されたかが論じられる。論証には、以下の各章においても同様であるが、既往の研究の参照に加え、アジア歴史資料センター所蔵文書等の一次史料が用いられている。

一八七四年の日本軍の台湾遠征に際して、日本軍は既に台湾、特にその南部の地図・海図五種を準備していたが、著者等の検討の結果、それらは英国、米国、清国より入手した地図・海図を基に編集・印刷されたものであることが明らかになった。また、当遠征により清国との緊張関係が高まり、更なる軍事行動の可能性が予測されたので、日本軍は一八七四年から七六年にかけて九種の清国沿岸地域の地図を作製しているが、これらも英国や仏国製の地図・海図類を基にするものであった。一方、一八七二年の春日艦派遣以来、朝鮮半島との関わりが始まった日本軍は、一八七三年以後、五種の朝鮮関係図を作製しているが、これらは、英・米・仏・露製の海図や中国・朝鮮製の地図を編集したものであることが明らかになった。

日本軍はまた、小縮尺のアジア大陸全図やその部分図を、一八七五年以来八種作製している。やはり既存の諸図より編集したものと考えられ、小縮尺であるため、民間用に印刷流布されたものもあると云う。日本軍は一方で、一八七九年から八七年にかけて、「清国沿海各省図」と題する少なくとも七種の図を作製している。これらは、内陸部については中国製または欧米製の地図により、沿岸部は欧米製の海図によったと判断された。

第三章「一九世紀後半における朝鮮半島の地図情報の収集と花房義質」は、清国に比べて遅くまで鎖国状態が続き、諸外国による地理情報の収集が困難であった朝鮮について、日本軍がどのようにそれを実行したかを明らかにし、特に日本の外務省高官花房義質の役割について論ずる。

一八七二年、花房の使節団が軍艦春日で釜山港に入り、倭館の接収を目指した時、日本側は米国製の海図を用意していたが、以後日本軍は米・英・仏国海軍製の海図を、さまざまな方法で獲得していったとされる。また内陸部の地理情報についても、我が国伝来の朝鮮関係資料に加え、朝鮮側作製の地図・地誌類や仏人神父の著書などを通じて蓄積していったと言う。

日本海軍はまた、一八七五年に再び軍艦を朝鮮沿岸に派遣し、海図作製のための測量を行い、この過程で江華島事件が起こった。

それを受けて翌一八七六年日朝修好条規（江華島条約）が締結されたが、日本側はこれらの交渉に際し、地理情報の収集、水路の測量を進めた。また当条約が、日本軍による海図の測量を容易にし、一九八一年までに約二二種の海図が作製された。それらは、開港候補地を重点としつつ、欧米諸国による海図作製が東海岸に偏っていたのに対し、地形が複雑で海図の存在がより必要とされた西海岸を中心とするものであった。海図以外にも、同時期に約十種の地図と地誌も作製されたと言う。

そうした中、一八八二年には壬午軍乱が起こり、日本の公使館が襲われ、日本の軍人や民間人が殺された。これを受けて済物浦条約と日朝修好条規続約が結ばれ、日本の公使館員等の地方旅行が可能になり、トラバース測量（経路に沿い移動しつつ距離と方位を測定し出発点に戻る測量法）による外邦図作製への道が開かれる。花房義質は、一八七二年の釜山出張以来、たびたび朝鮮に派遣され、日朝間の交渉の最前線を担った人物であるが、東京地学協会設立の主要メンバーでもあり、地理情報の重要性を強く認識していたと云う。彼は、朝鮮側の交渉に際し、しばしば地図を提示しつつ、相手側の地理情報提供を迫り、公使館での気象観測を始め、派遣された外交官や軍将校に地理情報の獲得と地学協会等でのその発表を奨励したと云う。

なお著者らは、単なる外国製地図・海図の編集ではなく、朝鮮での自前での測量をも伴った地図・海図作製を、Imperial Mappingの段階に達したものとするが、その特徴とされる地図を製作する社会と製作される社会の分断、後者に属する人々がそれらの地図を利用することがなかったと云う特徴が、この場合には当てはまらないと主張する。すなわち、日本側はこうして作製した外邦図群を、朝鮮側に複数回提供しているからである。

第Ⅱ部を構成する三つの章では、初期外邦測量原図が扱われる。まず第四章「中国大陸における初期外邦測量の展開と日清戦争」では、中国大陸に関する初期外邦測量図が作製された過程と、それが日清戦争への準備となったことを明らかにする。

中国大陸への陸軍将校の派遣は、一八七二年に始まるが、当初は一般的な軍事情報の収集に限られ、地図製作を主目的にした派遣は一八七九年以降であった。派遣された将校は、将来の清国との交戦を意識すると共に、『獨逸參謀要務』に基づく簡易な測量と地図作製の技能を教育されていたと云う。将校達は、まず旅行ルートを設定し、日本の公使館が発行し清国の地方官が副署する旅行免状を持参し、沿線の軍事関連情報（道路事情、橋や渡船の状態、渡渉河川の状況、集落の戸数や城壁・城門、物資調達の可能性など）を収集しつつ、簡易トラバース法（距離は徒歩の場合は歩数、馬車・馬利用の場合は所要時間から推算、方位はコンパスで測定）により、経路沿いの地図を作製して行った。旅行免状を携行していた点で、公式的には日清修好条規の範囲内の旅行であったとされるが、測量していることは隠されていた。将校たちの旅行範囲は、予想される戦場（満州、北京周辺、沿海部）を重点としていたが、内陸部にも及んでいた。

将校達によって、旅行ごとに測量を基にした地図（手描き原図）が作られた。経緯度のデータは英国製の海図によった場合が多く、出発点と到着点の間で生じた距離の誤差は補正された。こうした手描き原図群を編集して、一八九三年には「清国二十萬分

一圖」（最終的には六七図幅からなる）が出来上がり、印刷されて翌九四年には日清開戦に際して前線に送られたと云う。ただし、測量ルートを基にした「清国二十萬万分一圖」だけでは実戦には不十分で、日本軍は同図の説明書とも言うべき「沿道指鍼」又は「沿道圖説」、清国製地図を基にした「十里方眼圖」（約二五万分の一）、清国製地図の情報をも加えた「奉天省及直隷省中部輯製三十万分一圖」、北京近傍での測量に基づく「北京近傍圖」（五万分の一）をも用意したと云う。

第五章「朝鮮半島における初期外邦測量の展開と「朝鮮二十萬分一圖」の作製」は、中国にやや遅れて開始された朝鮮での簡易測量の経過と最終結果としての「朝鮮二十萬分一圖」の完成について論ずる。

朝鮮では一八八四年の日朝修好条規続約の締結後、本格的な内陸での簡易測量が可能になった。著者らは、日朝の各種史料及び米国議会図書館蔵の手描き外邦図より、それに従事した陸軍将校は一〇名、そのための旅行は二六回と同定し、旅行の日付やルート等をも明らかにした。旅行は朝鮮側に申請し発給された護照を基に、公使や領事の随員名義で行われ、朝鮮側の護衛が付いたので、監視状態下にあったとされる。旅行は基本的に馬を利用し、中国におけると同様、国境の状況を含む軍事情報の収集とトラバース測量による地図の作製が目的であったが、火事に遭った住民を救助するなど沿道住民との交渉もあったとする。

旅行後、中国におけると同様、将校達は手描き地図を作製した。距離についての補正に加え、方位については地磁気偏角の補正を行い、海図などを基に経緯度を外挿したが、これについては誤差が大きかったとされる。これらの手描き地図を編集して、ほぼ朝鮮全土をカバーする「朝鮮二十萬分一圖」が一八九三年に完成、その説明書である「沿道圖説」も作製され、翌年の日清戦争に利用されたと云う。なお、同図は日清戦争後、日本の逓信省や朝鮮王族に提供された他、ロシアの中国・日本担当武官も入手したとされる。なお、同図等を基に作製され、市販された「假製東亜輿地圖」は、当時の朝鮮半島の最新情報を伝えるものとして国際的にも評価されたと云う。

第六章「広開土王碑文を将来した酒匂景信の中国大陸における活動」は、さまざまな論争を生んだ広開土王碑文について、その墨水廊塡本を最初に持ち帰ったとされる酒匂景信が、どのような活動をする中で同碑文に遭遇したかを論ずる。

酒匂は、一八八〇年から八三年にかけて中国大陸に派遣された陸軍将校の一人で、華中・華北・満州に及ぶ四回の旅行により、「北京近傍図」の他に十五葉の手描き測量原図を完成させたとされる。酒匂はその最後の旅行で、満州東部の測量図作製を命じられ、朝鮮経由の帰国を望んだが、それは困難との上層部の判断で実現せず、朝鮮国境沿いの情報収集を目指したと云う。

著者らは、酒匂が碑文のある洞溝に到達したルートは、手描き測量原図の一つである「満州東部旅行図」を基に、従来考えられて来た鴨緑江下流から遡る経路ではなく、内陸の懐仁縣城から往復するルートであることを明らかにした。また、酒匂の帰国後に書かれたが、その執筆者について意見の分かれる「碑文之由来記」について、その内容は酒匂の調査結果を示していると結論づけた。なお、「満州東部旅行図」には、いくつかの挿絵が含まれ、

その一つが碑文のある「将軍塚」であることを紹介した。

第Ⅲ部は、著者らが発見した米国議会図書館蔵初期外邦測量原図のデータベースの構築過程を扱い、目録2種を提示する。まず、第七章「アメリカ議会図書館蔵初期外邦図データベースの構築」では、著者らがどのような方法でデータベースを構築したかを論ずる。

著者らは、発見した原図一点ごとに、まずサイズや書誌的情報等を示すカードを作成し、相互に隣接する地域を描く地図群を把握した。原図の撮影には固定させた35ミリフルサイズのデジタルカメラを用いたが、撮影に際しての技術的な苦労は大きかったと述べている。議会図書館側は、著者らの調査にあわせて日本人ライブラリアン達を動員してカタログの書誌データを整備してくれたと云う。このように撮影された画像を、データベースとして公開するため、著者らは帰国後、「イパレットネクサス」と云うアプリケーションを使用し、その開発者の協力をも得て効率的に仮公開にまで辿りついたと云う。

巻末に付された目録の第一は、「アメリカ議会図書館蔵初期外邦測量原図」目録である。ある地域について複数の図が作られている場合はそれらを「図群」とし、個々の図は「図幅」と呼び、図幅に複数の図が収録されている場合はその個々を「図片」と称し、それぞれ区別している。点数は、図片単位で見ると約五〇〇点に及び、うち朝鮮半島に関するものが約五分の一、残りが中国大陸に関するものである。目録には詳細な書誌情報が付されている。

目録の第二は、アメリカ議会図書館蔵「清国二十萬分一圖」目録である。同図の所蔵は、多くの機関や個人について確認されているが、最も多く（重複を含めて百二十点）を所蔵し、カバーする範囲が広いのが米国議会図書館であると云う。同図書館蔵図の来歴については、各図裏面の記載内容や所蔵者印から、日清戦争終結後、各部隊から返納され陸地測量部に集結されたものが、後に米軍に接収されたと推定している。目録には詳細な書誌情報が付されている。なお、参考として、スタンフォード大学所蔵の同図三八点の目録、及び国立国会図書館所蔵図の一部七点の目録も提示されている。これらによって、同図には異なる版が存在することも明らかにされた。

なお、本書には六つのコラムが収録されており、それぞれ初期外邦図をめぐる興味深い事実について記しているが、紙数の都合でその紹介は省略したい。

以上、本書は初期外邦図を扱った初めての学術書であり、そのほぼ全容を捉えた画期的な研究である。本書は多くの点で従来知られていなかった事実を明らかにしており、またいくつかの点で従来の見解を修正している。以下、その主要な点を列記して見よう。

一、明治以降の日本の海外地理情報の収集が、初期編集外邦図の時代→初期外邦測量図の時代→戦時測量外邦図の時代へと、段階的に進展したことを明らかにした。

二、初期編集外邦図の類型を設定し、類型ごとの書誌情報を含むリストを作製した。

三、個々の初期編集外邦図の作製課程を推定し、それらがどのような既存資料から作製されたかを明らかにした。

四、明治前期における朝鮮との関係の中で、地理情報獲得がいかに進められ、その際、外交官花房義質がいかに貢献したかを明らかにした。

五、初期外邦測量図の原図が米国議会図書館に所蔵されていることを発見し、その書誌情報を含む目録を作製すると共に、それらを撮影しデータベースを構築した。

六、初期外邦測量図原図より作製された「清国二十萬分一圖」の最大のセットを米国議会国会図書館で確認し、その目録を作製した。

七、初期外邦測量に従事した将校の氏名と派遣期間、測量旅行の日時とルート、作製した測量原図等を同定し、旅行や測量の具体的方法をも明らかにした。

八、公開土王碑文将来者酒匂景信の清国における具体的活動を明らかにするとともに、同碑文に辿りついたルートについて従来の説を修正した。

このように、本研究の成果は目覚ましいものがあるが、若干の疑問点や残された課題がないわけではない。最後にそれらについて触れておきたい。

まず、著者らも触れているが、初期編集外邦図、初期外邦測量図ともに、本書の表や目録で提示されたものが、実在した全てのものではないと思われる。編集外邦図については、今後、国会図書館や内閣文庫所蔵以外にも探索が必要であろう。外邦測量図についても、米国議会図書館所蔵の図群番号に多くの欠番があることは、同様なことを物語っている。

次に、著者らが第三章で、日本側の朝鮮に関する地図作製が Imperial Mapping の段階に達したが、日本側から朝鮮側に作製した地図の提供があったため、Imperial Mapping の特徴に当てはまらないとしている点についてである。これについては、地図の提供自体が交渉における示威行為であった可能性もあろうし、提供された地図が朝鮮側で王族や一部政府機関で死蔵されたのではなく、有効に活用されたかどうかも知っておく必要があろう。

これとも関連するが、著者らは同じく第三章四節で、花房義質の地理思想について論ずるとし、花房の行動について詳述している。そこから評者なりに判断すると、著者らが考える花房の「地理思想」とは、一、交渉相手国の地理情報の積極的な獲得が極めて重要との認識であったこと、二、獲得した地理情報は広く学界（あるいは社会）に公表し共有すべきで、交渉相手国にすら提供すべきものであるとの考えであったこと、この二点であると思われる。今少し、著者らの明示的な整理が欲しかったところである。

最後に初期外邦測量の合法性についてである。著者らは、測量に従事した将校達は旅行免状・護照を携行していたので、非合法な旅ではなかったとする。ただし、測量行為そのものは秘密とされていたし、申告された旅行目的にも入っていなかったであろう。日露戦争以後に日本軍が実行した秘密測量[2]に比べれば、非合法性は弱いと言えようが、合法と言い切れるものであったであろうか。

しかし、以上のような若干の問題点も、本書の大きな成果を些かも減ずるものではない。本書は、初期外邦図の最初の体系的研究として、我が国の地図史・測量史研究のみならず、軍事史・外交史研究の分野においても、今後、参照され続けるであろう。

① 京大総合博物館収蔵の外邦図については、評者らによって目録が作られ、その後改訂版も出されている。『京都大学総合博物館収蔵外邦図目録』京都大学総合博物館・京都大学大学院文学研究科地理学教室、二〇〇五年。同第二版、二〇一〇年。

② 小林茂『外報図――帝国日本のアジア地図』中央公論社、二〇一一年、第八・十章。

（B5版　二六六頁　二〇一七年二月　大阪大学出版会　税別七四〇〇円）

（京都大学名誉教授）